

## S-7 避難者の行動や思いを避難環境と結ぶ

### —地図・現場での証言の時空間的検証—

岩船昌起（鹿児島大）

【はじめに】『3・11 残し、語り、伝える 岩手県山田町東日本大震災の記録』（2017 年 5 月発行。以下、「山田町震災記録誌」）の制作作業で演者らが担当した第 3 章第 1 節「津波の来襲と避難（P134～225）」では、「津波から命を守る」目的を果たすために、パーソナル・スケールでの時空間現象の整理を重視した。将来世代や他地域の人びとに「山田町の現代世代が経験した避難行動」を伝えるには、「津波てんでんこ」に象徴されるように“個人”が行動の基本となるからである。そこで、避難者本人の手記と時空間情報が整理された記録との比較を行い、避難者の行動や思いと避難環境との結び付きの度合いを検証する。

【方法】山田町で被災した A 氏にかかわる事例を、(1)山田町他編（2015）『百九人の手記（略称）』に掲載された本人の手記と(2)「山田町震災記録誌」で演者が A 氏から聞き取って検証して地図と図を付しつつ整理した記録を対象とする。両者で「時空間が具体的に分かる言葉・文章」の箇所を抜き出し、記録の文字数との関係を比較した。

【結果】(1)『百九人の手記』では、本文 973 字中に時空間に係る箇所が 6 箇所（時間 2 + 空間 4）、平均約 162 文字に 1 箇所出現する。また、掲載された田の浜地区の地図と対照できる本文の箇所は 0 箇所である。地図には縮尺がなく、他の地図等を参考にしないと避難行動の考察で重要な空間距離が分からない。(2)「山田町震災記録誌」では、本文 1961 字中に時空間に係る箇所が 27 箇所（時間 6 + 空間 21）、平均約 73 文字に 1 箇所出現する。地図と対照できる箇所が 14 箇所ある。また、縮尺と等高線から水平垂直方向に m 単位で読図できる地図に移動経路が明示されている。そして、横軸を時間、縦軸を標高とした図で、移動行動とその地区での津波浸水高（推定）について標高の変化を読み取れる。

【考察】聞き取り調査から、避難行動の当事者は避難時の時刻が分かる情報をほとんど得ていない一方で、その時々何をしたか、移動経路や避難環境等の空間情報を多く覚えていることが分かった。(2)「山田町震災記録誌」では、採録された行動時の時刻が分かる情報が少なくても、得られた空間情報、避難者の行動内容、年齢性別等から推定できる体力や車等の移動手段の一般的な速度も手掛かりとして、地図や現地で空間移動を検証でき、地震発生から避難場所等に避難するまでの行動を凡その時刻も含めてほぼ再現できた。そして、「山田町震災記録誌」第 3 章では、「①逃げる主体である人間がどのような状況下でどのような過程を経て移動したか」が明らかになっただけでなく、移動地点ごとの思いや経験についても聞き取って生起順に挟み込んでいるので「②その過程の中で何を見聞き感じて何を考え判断して行動につなげたか」を空間軸・時間軸に沿って整理できている。

【おわりに】「山田町震災記録誌」は、避難者個人の当時の避難行動がその過程での思いや経験とともに時空間的に整理されている、地元から発信された「災害記録誌」であるが、山田町の将来世代だけでなく、現在世代の他地域の人びとにも「当事者の行動や思い」を高い再現性を持って伝承できる情報を保持している。このような時空間情報が整理された「災害記録」は、「防災教育の教材」として学校や社会でも活用でき、生々しく追体験できるバーチャル・リアリティ（仮想現実）等の未来の技術にも今後適用可能であろう。